

学位(課程博士)論文審査及び最終試験報告書

2021 年 7 月 30 日

人間文化学研究科長
野 田 春 美 様

学位論文審査委員会

審査委員長 長谷川 弘基
審査委員 宇 野 文 夫
審査委員 中 村 健 史
審査委員 中 山 文
審査委員 森 平 崇 文



本学学位規則第 8 条の規程により、論文審査の要旨及び学位の授与に関し

下記のとおり報告いたします。

記

学位申請者	江 玉
論文題目	21 世紀における川劇 ―文化資源的視点から

論文審査の要旨

【論文の概要】

当該論文は七章より成り、第一章で川劇を文化資源の視点から研究する目的及び手法等を述べ、第二章、第三章で川劇の歴史的変遷と後継者育成について概観する。続いて第四章では成都市「結義楼」における川劇公演の実態を調査し、川劇の商業的文化資源の側面を明らかにする。第五章では新作川劇『塵埃落定』におけるギャロン・チベット文化移入の様相を詳らかにし、従来の新作川劇に比べ洗練された作品になっていると評価する。第六章では四川省内の学校で川劇が授業の一環として取りあげられている現状を調査し、川劇が教育的文化資源としての側面を持っていると考察する。第七章では以上を踏まえ、21世紀の川劇が文化資源としての性格を拡大しつつあることを指摘し、全体の結論とする。

【内容の評価】

当該論文は中国四川省の伝統演劇である川劇について、特にその社会的位相に焦点を当て考察を行ったものである。本論文は人間文化学研究科学位論文審査基準を満たし、以下の三点において、研究の独自性を主張している。

第一は、「文化資源」という視点でのアプローチである。従来中国伝統劇の研究は作品研究や歴史研究が主流であり、社会学的な調査に基づいた市場研究や観客研究が萌芽状態にある中、本論文は川劇を「文化資源」として捉えなおし、それが四川文化、あるいは中国文化を代表するものとして、商業や教育の場で活用されている状況を考察している。これは川劇研究としては新しい視点であり、国家の文化政策の下で制約と援助を受けてきた川劇が娯楽として自立する力を取り戻しつつあるとする結論は、おおむね妥当なものと評価できる。

第二は、筆者の俳優と研究者を跨ぐ立ち位置から生じる独自性である。筆者は俳優としての内部者の視座と客観的に変化を記録し考察する外部者の視座を持ち合わせており、結義楼における関与観察と舟石伝承でのインタビューには俳優同士だからこそ入手できた詳細な内情が含まれ、貴重な資料となっている。経済的豊かさと伝統演劇の伝承を両立させようとする若手俳優たちの活動は、80年代の下海ブームには見られなかった四川文化継承者としての使命感とプライドを反映し、それが地域アイデンティティとして川劇を学ぼうとする人々の情熱と呼応して、川劇が新たな存在価値を発揮しつつある現状を映し出している。これは、当事者と経験を共有する筆者だからこそ把握できた21世紀特有の状況である。

第三は、少数民族文化を題材とした川劇創作に伴う障壁に光を当てたことにある。少数民族文化の川劇化は多民族の文化融合という政治的意図に基づいているが、『塵埃落定』の成功に認められるような成都市川劇院の成果は、政治と芸術の両立が困難であることを逆説的に伝えている。これも筆者と国立劇団関係者とのインタビューで明らかにされたことである。

以上のように本論文は、近年注目される「文化資源」という観点から川劇を捉え直し、また日本国内ではほとんど紹介されていない現代川劇の実態を、詳細なデータや現場でのインタビューを基に明らかにしている点で学術的価値が認められる。よって、博士(人間文化学)の学位を授与するに相応しいものと認める。なお、予備審査段階では掲載見込みであった論文は予定通り学会誌に掲載され、審査委員会において申請要件の充足を確認した。